

聖徳大学楽習フェスタ2009

～第11回聖徳大学生涯学習フォーラム～報告

日時：平成21年6月13日(土)・14日(日) 両日10:00～16:00

会場：聖徳大学生涯学習社会貢献センター

主催：聖徳大学生涯学習研究所

共催：NPO法人全国生涯学習まちづくり協会

後援：千葉県教育委員会、松戸市、松戸市教育委員会、全国生涯学習まちづくり研究会
松戸駅周辺にぎやか推進協議会

協力：聖徳大学人文学部生涯教育文化学科、聖徳大学児童学部児童学科児童文化コース
生涯学習研究同好会「りりーず」、新京成電鉄

参加者：1日目 443名

2日目 304名(毒蝮三太夫さん講演会154名)

生涯学習研究所は、過去10回、生涯学習フォーラムという事業(以下本事業)を開催してきた。その実績を基に、今回、実施内容等を改めて検討し直し、聖徳大学、生涯学習研究所および、生涯学習社会貢献センターの地元地域とのつながり、地元地域へのPRの重要性の再確認を目指した。今年度の本事業は、「楽習フェスタ2009～第11回生涯学習フォーラム～」と題し、地域と大学、市民と学生の発表・交流の機会の創出を目的として、6月13、14の両日にわたり、開催した。来場者数目標は各日200人のところ、13日443人、14日304人と大幅に上回った。「ひと×出会い×つながり」をテーマに、「まなぶ」「たのしむ」「あじわう」とカテゴリー分けした各企画を実施し、子どもたちによる盛大な和太鼓演奏によって幕を開けた。



「まなぶ」企画は、本事業の中核である分科会・講演がメイン企画である。分科会は、全国でまちづくりに奮闘する人々をパネラーにした「まちづくり実践交流発表会」、福留強所長が聖徳大学オープン・アカデミー公開講座(以下SOA)で開講中の「巨人軍の社会学」の特別編、子どもに関わるリーダーたちによる「学校外活動で私たちができること」を行った。本学客員教授の毒蝮三太夫さんによる講演「マムシ流こころとからだの健康法」を行った。それぞれ参加者は、27人 23人 15人、講演が154人(事前申込み制、定員150人)であった。

このほか、生涯学習研究所と松戸市民が共同開発した「まつどの先生プログラム」の実践発表や、生涯学習課の協力によるSOA体験講座、地域交流を目的に松戸市内のみならず、周辺各地で活躍する市民団体やガールスカウトなどに活動発表の場を提供した。各団体の独自の事前PRなどの積極的な参加が、来場者数増加につながったと考える。



「たのしむ」企画の中心は、全国でまんじゅうを使ってまちおこし・まちづくりを行う人々が集結した「まんじゅう試食コーナー」および座談会「まんじゅう茶(ちゃ)ミット」である。試食コーナーは、いずれも好評で、用意したまんじゅうはほぼ完食となった。座談会は、発表者ならびに参加者30人すべてに、浴衣を着た学生が、まんじゅう



う・抹茶を供し、アットホームな雰囲気を作り出した。このような配慮もあり、参加者から満足の声をいただけた。

「まんじゅう茶(ちゃ)ミット」会場の14階にはステージを設置し、民芸玩具「吹き戻し」を使ったじゃんけん大会や、フォーク、沖縄民謡、演歌、ハワイアン、シャンソンのプロ、セミプロなど地域で活躍する人々が中心となった音楽ライブを行った。観客参加型イベント

のじゃんけん大会は、初日午前にも関わらず、子どもを中心に好評を博した。各種音楽ライブは、途切れることなくステージプログラムを進行させたため、どの時間帯も明るい音楽が流れる心地よい空間の演出となった。

また、子どもを対象にした「たのしむ」企画として、ちびっこわくわくゾーンを設置した。フラワージェル作りや、オカリナ絵付けといった体験型プログラム、伝承遊びのコーナー、3階施設を利用した乳幼児の遊び場を用意した。館内めぐりを目的に、新京成電鉄・野村證券より景品提供を受け企画した「スタンプラリー」は、子どもから大人まで幅広い世代が参加し、反響が大きかった。前述の分科会 の関連イベントとして、2階展示スペースで行った「ファンが集めた巨人軍のお宝展」も、中高年男性を中心に、従来、生涯学習社会貢献センターに来館されたことがなかった方々の来館機会の創出に寄与した。

「あじわう」企画で来場者に好評だったのが、全国で生涯学習まちづくりを実践する個人や、各種団体が参加したコミュニティビジネスサミット「全国地域じまん博覧会」である。松戸駅周辺にぎやかし推進協議会による「一店逸品運動」をはじめ、新潟県長岡市の産直野菜、岩手県大船渡市、大分県佐伯市の海産物などを紹介した。商業施設で行われる、販売を主眼に置いた物産展とは異なり、各ブースとも、地場産品の紹介に力を入れる様子は、まさに地域じまん。来場者とブーススタッフ、学生の笑顔であふれる交流の場となった。

本事業は、学生ボランティアをはじめ、学内外問わず様々な方が運営・企画に関わり実現した事業である。今後もこのつながりを大切に、生涯学習研究所の活動を展開していきたい。

(文責：長谷川修一)

